クリスマスのちいさなかね

画／マヤ・ドゥシコウワ
文／ロルフ・クレンツァー
訳／女子パウロ会

女子パウロ会

むかし　イスラエルの　ちいさなまち　ベツレヘムに
ラヘルという　おんなのこが　いました。
おかあさんは　いません。ラヘルが　ずっとちいさいとき
しんでしまったのです。おとうさんは　ひつじかい。
よるも　ひつじのばんをしながら
たいてい　まきばに　とまります。
だから　ラヘルは　よるも　たびたび　ひとりぼっち。
さびしいけれど、よるは
けものが　ひつじを　おそうので、
おとうさんは　ひつじから　めを　はなせないのだと
わかっていました。

あるひ　ラヘルは
たびびとが　おおぜい　ゆききする　やどやのまえの
ほこりだらけの　みちばたで
ちいさな　ぎんの　かねを　ひろいました。
なんともいえない　きれいな　ひびきです。
やどやの　おきゃくさんが　おとしたのでしょうか。
ラヘルが　たずねても　みんな　しらないと　くびをふるばかり。
まちはずれに　すんでいる　おばあさんに　みせると、
おばあさんは　かねのねに
じっと　みみを　かたむけてからいいました。
「これは　とくべつな　かねだよ。この　かねは
なにか、とくべつな　ことが　おきるときまで
だいじに　もっていなさい。きっと、あんたが　このかねを
よろこんで　あげたくなるような、
とても　いいことが　おきるよ」
「それって、どんなとき？」と、ラヘルは　おおきな　めを
くりくりさせながら　ききました。「いつおきるの？」
おばあさんは、かたを　すくめて　こたえます。
「わたしは　しらない。かみさまだけが　ごぞんじのこと」
ラヘルは　だいじな　たからもののように
ちいさな　かねを　じぶんの　まくらのしたに　おきました。

ある　とても　さむいひのこと。
ひとりのおとこと　そのおくさんが
このまちに　やってきました。
ながい　たびを　してきたらしく　とても　つかれていて、
おくさんは　おおきな　おなかを　かかえ、
いまにも　あかちゃんが　うまれそうでした。
ふたりは　とめてもらえる　いえを　さがしましたが、
どこでも　ことわられるばかり。
やっと　ひとりの　ひとが、いってくれました。
「うちの　ふるいうまやなら　とまっていいよ。
こんや　ひとばんだけでも　あんぜんだろう」
ふたりは　とても　よろこびました。

そのよる
この　すきまだらけの　まずしい　うまやで
イエスさまが　おうまれになったのです。
おかあさんのマリアさまは、
よういしてきた　うぶぎで、
そっと　イエスさまをくるみ、
かいばおけに　ねかせました。